

平成30年度 平和教育研修 少年の塔慰霊祭



8月4日（土）、伊那公園内「少年の塔」前において、平和教育研修「少年の塔慰霊祭」が行われました。地域の方、教職員にも広く声をかけ、当日は一般参加者、教育会会員、役員を含め約60名が参加し、全員による黙祷の後、飯澤教育会長から追悼の言葉、そして北原和夫氏のお話をお聴きしました。最後に、参加者全員で献花、焼香を行いました。

「少年の塔慰霊祭」は、「上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡り、再び祖国の地を踏むことのできなかった青少年の御霊を慰霊し、永遠の平和を祈念する」趣旨で、公益社団法人上伊那教育会の平和教育研修事業として毎年行っています。

「追悼の言葉」

太平洋戦争終結から、73年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陆に渡り、志半ばにして荒野に散った90余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和7年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と、広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に、軍事的にも北の守りを固めようとする、国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿達「義勇軍」もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和12年から終戦までに郡下で約500名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和20年8月9日 対日戦線布告をしたソ連軍が大陸南下し、満州に攻め入りました。「王道楽土五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、極度の混乱と暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、若き命を異境の地に散らせた90余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遙か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本や世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事も少なくありません。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々思いを寄せると同時に、戦後73年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

90余名の若き御霊よ、安らかに眠りください。

平成30年8月4日

公益社団法人上伊那教育会 会長 飯澤 隆

元上伊那教育会選任幹事 北原 和夫 氏のお話



本日は早朝より、『少年の塔』の慰霊祭に出席いただきましたことに対し、生存者の一人として厚く御礼申し上げます。

この『少年の塔』が建立されたいきさつ等について、少し話をさせていただきます。碑文にも書かれていることですし、お集まりいただいた多くの先生方の承知をしておりますが、「太平洋戦争中、幾多の若い生命が、満蒙開拓青少年義勇軍として、また学徒動員として、祖国の平和を願いながら消えていった、その若くして散った霊を慰めるために、この塔を建て永遠の平和を祈念するものである」と碑文に書かれているわけです。

この塔の作者は、わが郷土辰野町出身の芸術家瀬戸団治先生です。お願いしたところ、快くお受けいただいてつくっていただいたわけです。あの台石は、岡山の桜御影石、碑文を書いていたのは、書家の藤澤正俊先生といって高等学校の先生でした。

この話が持ち上がったのは、昭和33年で、矢島則敏先生、小林計實先生、青山弥八先生の頃でした。そして、昭和34年青山先生が教育会長の時に、代議員会にて議決して、建立ということになったのです。像が完成したのは、昭和36年4月、除幕式の日は、桜花爛漫の好天に恵まれ、神仏両面の行事として除幕式を行うことができました。

上伊那教育会が主体となり、上伊那の市町村会へ陳情し、協力を得て建立と相成ったわけです。もちろん、各学校、PTA、児童生徒、教職員、先輩ほか、我々生存者も協力、浄財を抛出したわけです。金額にして、当時のお金で約85万余円が集まったと記憶しています。特に、教職員組合の専従であった、梅垣英人先生の塔建立につきましてもご努力は、忘れることはできません。

義勇軍の送出についてですが、当時の大東亜省から県へ指令があり、県の指令で信濃教育会、各郡市教育会が中心となって希望者を募集したのでした。昭和16年には、希望者は上下伊那で約200名が集まり、原（上下伊那出身）中隊・一個中隊が編制されました。また昭和17年度には私もその隊員の一人だったわけですが、上下伊那と諏訪で250名が集まって、南向（中川村）出身の小池吉郎先生が隊長をつとめる、小池中隊が編制されたのでした。その隊では、後に上伊那教職員組合の専任書記を勤めていた、梅垣英人先生もご一緒でした。

昭和18年は、上下伊那と諏訪で250名が集まって、両角（諏訪出身）中隊が編制されたのです。それ以前は、中南信地区で一個中隊が編制されて、宮下慶正先生が隊の幹部としておられました原中隊は、ハルピンからさらに北の中ソ国境近くの伊拉吟（イラハ）訓練所に入所しました。私たちの小池中隊は、ハルピンの北の北安省でしたが、伊拉吟よりさらに東北の鉄驪訓練所（18ヶ中隊が集まった北満一の大訓練所）へ入所、翌年の両角中隊は、それよりまだ少し北の三江訓練所へ入所となったのです。

そして、それぞれの隊で訓練中に終戦になりました。それから（終戦後）は、ソ連の命令により列車で南下。我々の中隊はほとんど奉天にて下車を命ぜられ、そこで避難生活に入ったのです。避難した翌日から、ソ連の命令による奉天の三井・三菱・住友などの大工業地帯（軍需産業）、および鉄西の飛行場などでの使役。明けても暮れても毎日毎日重労働が続きました。そこでの生活は、ソ連兵、中国人の略奪にあって大変惨めなものでした。

9月、10月、11月の3ヶ月。コウリャン飯のおにぎり1日2個だけで、空腹に耐えきれず朝のうちに昼食を食べるという有様。避難生活は食料も何もなくなただけで餓えと寒さ。熱病に冒されても治療薬もなく、発疹チフスや赤痢等々、朝になれば息絶えている犠牲者が続出。その有様は筆舌に尽くせぬものがありました。

だんだん仕事がなくなってきた、12月から翌年の5月引き揚げまでの間にも、どんどん犠牲者が出ました。この経験は、生涯忘れることはできません。当時20歳前の青少年が祖国の土を踏むことなくして亡くなり、さぞかし無念であったろうと心からご冥福を祈ってやみません。

一つ付け加えておきますと、お隣にある碑ですが、もともと諏訪地区にあったものですが、ここに『少年の塔』が建ったということで、これと一緒にの方がよいだろうということで、ここを管理する伊藤神官さんの許可を得て、宮下慶正先生が中心になって移したものです。

教育の現場にいる先生方にとっては、道徳、倫理、モラルの問題など、ご指導が大変なことも多いと思います。社会全体で、道徳、倫理、人間の本当の絆（ヒューマンチェーン）、生命の尊厳をしっかりとしましよと叫ばずにはいられない今日です。

苦しいところを生きてきまして、平和の尊さをつくづく思います。先生方の昼夜、献身的なご努力に衷心より感謝と敬意を表します。蕪辞を申し上げ、お礼にかえさせていただきます。本日はまことにありがとうございました。

慰霊祭に先立ち、8月3日（金）少年の塔 秋の周辺整備作業が行われました。
今回は、中部を中心とした代議員の先生方と教育会役員で、作業を行いました。



整えられた環境で、『少年の塔慰霊祭』ができましたことに、感謝いたします。誠にありがとうございました。

